富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン
～ 42 ヒメシュウメイギク ～

職藝学院
教授　渡 邉 美保子

シュウメイギクは、中国原産のキンポウゲ科の宿根草です。草丈は100cmほどで、白や桃色の一重や八重の花が咲き秋を彩ります。様々な品種がありますが、草丈が50cm前後の矮性のものは、ヒメシュウメイギクと呼ばれ、花壇の手前に植栽すると夏から秋まで楽しむことができます（写真１）。

写真１　手前はシュウメイギクの矮性品種ダイアナ。10月初旬。花のように見えるのは桃色と濃い桃色の萼片。後ろは、銅葉のフジバカマの仲間（ユーパトリウム品種チョコレート）。

ヒメシュウメイギクは、地中から出ている根出葉を持ちます。ブドウの葉によく似た３つに分かれた葉が地面からたくさん突き抜けているような姿になります。４月から７月にかけて気温の上昇とともに、葉も大きくなり地面を覆ってゆくので雑草の侵入を抑えることができます。

７月中旬になると、重なり合った葉の下では丸い蕾をつけた茎が待っていて、ある日突然ひょっこりと葉の上に顔を出します。次から次と葉と葉の間から蕾をつけた茎が伸びて葉の高さをどんどん越えてゆきます。茎が40cm位になった頃、紅紫色に染まった蕾が割れて黄色の雄しべと桃色の花びらが見え始めます。（写真２）。実は花びらのように見えているのは、萼片（がくへん）と呼ばれるもので細かい毛におおわれています。外側の紅紫色の萼片２枚が開くと、その内側に３枚の桃色の萼片を包み込んでいたのがわかります（写真３）。３日後には雄しべをかきわけるように丸い雌しべが現れます（写真４）。その翌日には萼片が一枚ずつぱらぱらと落ちてゆきます。花茎の先端の萼片が落ちても、その下には向かい合う紅紫色の茎が両腕を広げるように伸びていてその先端の蕾がふくらんでゆきます。お盆の頃から咲き出して10月初旬まで、のんびりと開花し続けます。茎や葉が枯れ始めるのは11月頃ですが、枯れた茎を切るのを我慢できれば、果実が綿毛のように変化する姿を見ることができます（写真５）。

ヒメシュウメイギクは、明るい半日陰から日向を好みます。午前中だけ陽が差すような場所がお気に入りです。葉に光が当たることで花付きが良くなります。根元は乾きを好みませんので、腐葉土などでマルチングを行うか、タイム・ロンギカウリスやゲンペイコギクなどを周りに植えて地面を覆って乾燥しないようにすると良いでしょう。

写真２　2枚の萼片が割れて中から3枚の桃色の萼片が現れる。すでに雄しべが見える。開花当日。

写真３　紅紫色の萼片と桃色の萼片が交互に並ぶ。開花当日中には萼片が開き雄しべが現れる。

写真４　萼片が開いてから3日後には、中央に丸い雌しべが見えてくる。外側の紅紫色の萼片の色が薄くなり桃色に変化する。

写真５　11月中旬になると茎と果実が枯れて黒くなる。しばらくすると果実は綿毛のように変化する。